

ダニエルの書 - 第四百十八号

預言の板を解き明かす：ハバククの幻とミラーの夢

Jeff Pippenger

2024-03-20

ウライ川の幻に示されている知識の増大こそが、最終的にハバククの二枚の板に書き記されたものである。

彼らが再臨の時に当てはまると見なしていた預言とともに織り込まれていたのは、彼らの不確かさと不安の状態に特別に適合した教えであり、今は彼らの理解には暗い事柄も、やがて時が来れば明らかにされると信じて忍耐強く待つよう彼らを励ますものであった。

これらの預言の中には、ハバクク書2章1~4節のものもあった。「私は自分の見張り所に立ち、物見台に身を置き、主が私に何を語られるか、また私が戒められるとき何と答えるべきかを見ようと見張っていよう。すると主は私に答え、言われた。『幻を書き記し、書板の上にはっきりと記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のためのもので、終わりには語り出し、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れはしない。見よ、高ぶる者の魂は彼の内に正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。』」

早くも1842年には、この予言に記された「幻を書き、これを読む者が走るができるように、板の上に明瞭にせよ」という指示が、チャールズ・フィッチに、ダニエル書と黙示録の幻を説明するための予言図の作成を思い立たせていた。この図の刊行は、ハバククによって与えられたその命令の成就であると見なされた。しかしその当時、同じ予言の中に、幻の成就には見かけ上の遅延-「遅延の時」-が示されていることに気づいた者はだれもいなかった。失望ののちには、この聖句が非常に意味深く思われた。「この幻はなお定められた時のためであり、終わりには語り、偽ることはない。たとえ遅れるように見えても、それを待て。必ず来て、遅れることはない。……義人はその信仰によって生きる。」 The Great Controversy, 391, 392.

ハバククの二枚の板は、預言的には二人の証人である。聖書的には、真理を確立するために二人の証人がそろえられなければならない。

しかし、もし彼があなたの言うことを聞き入れないなら、さらに一人か二人と一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の口によって、すべてのことが確証されるためである。マタイ 8:16

ハバククの二つの表（1843年と1850年のパイオニア・チャート）を互いに重ね合わせると、ミラーの夢の「宝石」であった真理が裏づけられる。第一の表に示された1843年の誤りは、第二の表と重ね合わせると、幻の「遅れる時」を示す。ミラー（その歴史における象徴的な見張り人）は、その歴史をめぐる論争のさなか、何を語るべきかを尋ねた。

私は見張りの持ち場に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何と言われるか、また私が戒められるときに何と答えるかを見よう。ハバクク書 2:1

主はミラーに幻を書き記すよう命じ、ミラーは夢の中でその幻を収めた小箱を部屋の中央にあるテーブルの上に置いた。

主は私に答え、こう言われた。「幻を書き記し、それを板にはっきりと記せ。走りながらも読めるように。」ハバクク書 2:2

その後、表は滞留時間と最初の失望を示す。

この幻は、なお定められた時のためのもので、終わりには明らかになり、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。ハバクク書 2:3.

そして、知識の増加に基づいて現れる二つのクラスが示される。

見よ、彼の魂は高ぶっており、彼のうちに正しくない。しかし、義人は自分の信仰によって生きる。ハバクク書 2:4.

二種の礼拝者は、ダニエル書第十二章における試練の過程によって明らかにされるだろう。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

ダニエル書の「賢い者」とは、信仰によって義とされたマタイ二十五章の賢い乙女たちのことであり、「悪しき者」とは、高ぶっていた愚かな乙女たちのことである。ミラーの夢の最後には、宝石は十人の乙女のたとえにおける油を表しており、その油はメッセージであった。

神が私たちにお送りになる御告げを受け入れないとき、神は辱められる。こうして私たちは、暗闇にいる者たちに伝えられるために神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を拒むことになる。「見よ、花婿が来る。出て迎えよ」という呼び声が響くとき、聖なる油を受けていないで、キリストの恵みを心に大切にしておかなかった者たちは、愚かな乙女のように、主にお会いする備えができていないことに気づくだろう。彼らには自ら油を得る力がなく、その生涯は難破する。レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月20日。

終わりの時代には、ミラーの宝石は十倍も明るく輝き、十という数も光も、ともに試しの象徴である。ミラーの夢の結末に示されている終わりの時代において、ハバククの表に示された真理の光は、試しのメッセージを生み出すが、十人の乙女のたとえにおいては、それは真夜中の叫びという試しのメッセージである。その試しの過程は、ミラー派の歴史における試しの過程の繰り返しである。なぜなら、十人の乙女のたとえは、終わりの時代に一字一句そのまま繰り返されるからである。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同

様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

遅延の時の経験はミラーの夢の終わりにおいて文字どおり繰り返され、そのとき彼の宝石は太陽よりも十倍明るく輝き、これによりその宝石が十人の乙女のたとえにおける最後の試練を表していることが示される。十は試練の象徴であり、十日が終わるとダニエルと三人の友は、バビロンの食物を食べていた者たちよりも顔色もよく、肉付きもよかった。ハバクク書において、信仰ではなく思い上がりによって生きる高ぶる者は、バビロンの性質を身につけた。ミラライトの歴史では彼らはバビロンの娘たちとなり、またハバクク書では、その性質を指し示すものとして教皇制が取り上げられている。

見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。また、彼は酒のゆえに背き、高ぶる者で、家にとどまらず、その欲望をよみのように広げ、死のように決して満ち足りることがなく、すべての国々を自分のもとに集め、すべての民をもかき集める。これらすべての者は彼に対して警えを取り上げ、また、嘲りのことわざをもって言わないだろうか。「自分のものではないものを増し加える者に災いあれ。いつまでか。厚い泥を自分に負い込む者にも災いあれ。」突然、あなたを噛む者たちが立ち上がり、あなたを苦しめる者たちが目を覚まさないだろうか。すると、あなたは彼らの戦利品となる。あなたが多くの国々をかすめ奪ったからだ。民の残りの者は皆、あなたをかすめ奪う。人の血のゆえに、また、地と町と、その中に住むすべての者に対する暴虐のゆえに。ハバクク書 2:4-8

マタイ25章の乙女たちに降りかかった試練の過程は、北の王（教皇制）の品性を培った礼拝者の一群を生み出す。この北の王はまた、「多くの国々を荒らした」権力でもある。

主はこう言われる。見よ、北の地から民が来る。地の果てから大いなる国が起こされる。彼らは弓と槍を握り、残忍で、憐れみを知らない。その声は海のように轟き、馬に乗り、戦う者として隊列を整え、シオンの娘よ、あなたに向かって来る。私たちはその報せを聞き、私たちの手は弱り、産みの苦しみのような痛みが私たちを捉えた。野に出るな、道を歩くな。敵の剣と恐れが四方にあるからだ。わが民の娘よ、粗布を腰に締め、灰の中で転げ回れ。ひとり子のためにするように喪に服し、最も苦い嘆きをせよ。略奪者がにわかに私たちに襲いかかるからだ。エレミヤ書 6:22-26

ハバククの二つの階級は、信仰によって義とされる者たちと、バビロンの教義を食べ、飲んだ者たちである。ミラーの夢において乙女として表されている終末の時代の人々は、キリストの品性を形成し、その結果、神の印を受けるか、あるいは教皇制の品性を形成して獣の刻印を受ける。

道徳の闇のただ中に、真の光が輝くべき時が来た。第三天使のメッセージは、額または手に獣またはその像の刻印を受けることに対して人々に警告しつつ、世界に向けて発せられている。この刻印を受けるとは、獣が下したのと同じ決定に至り、神の言葉に真っ向から反する同じ考えを主張することを意味する。この刻印を受けるすべての者について、神はこう言われる。「その者は、神の怒りのぶどう酒、すなわち薄められることなく神の憤りの杯に注がれたものを飲み、聖なる天使たちと小羊の御前で、火と硫黄によって苦しめられる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月13日。

バビロンのぶどう酒を飲む乙女たちは、ついには神の怒りのぶどう酒を飲むことになる。イザヤ書では、エフライムの酔漢たちは、物事をひっくり返すことによって自らの盲目的な酩酊を露わにし、その行為は「陶器師の粘土」と見なされる。

「the daily」をキリストの象徴とする同定は、「the daily」に関する真理を転倒させる。というのも、「the daily」はサタンの象徴だからである。ミラーによる「the daily」を異教とする同定は、ハバククの表において直接に表象されている。ミラーによる、テサロニケ書簡の該当箇所の発見は、神の神殿に座する「罪の人」が顕わにされるために「取り去られた」のは異教であると彼に理解させたものであり、テサロニケ人への第二の手紙第二章に見いだされる主要な真理である。

「さらに読み進めたが、[the daily] が見いだされる別の例は、ダニエル書以外には見つからなかった。そこで私は[コンコーダンスの助けを借りて]それと結びついている語、『取り去る』——『彼は the daily を取り去る』、『the daily が取り去られる時から』など——を取り上げた。さらに読み進め、この箇所についての光は見いだせないのではないかと思ったが、ついにテサロニケ人への第二の手紙 2章7、8節に行き当たった。『というのは、不法の神秘はすでに働いている。ただし、今妨げている者が取り除かれるまで妨げ続ける。そしてそのとき、あの不法の者が現される』等。そしてその聖句に至ったとき、おお、何と真理が明瞭に、しかも栄光に輝いて現れたことか。これだ！ これこそ the daily だ！ さて、ではパウロが『今妨げている者』、すなわち阻む者によって何を意味しているのか。『罪の人』および『不法の者』によっては、教皇制が意味されている。では、教皇制が現されるのを妨げているものは何か。そう、それは異教である。すると、『the daily』は異教を意味していなければならない。-William Miller, Second Advent Manual, 66ページ。」 Advent Review and Sabbath Herald, 1853年1月6日。

ミラーが発見したテサロニケ人への手紙における“the daily”の意味こそが、当該箇所の主要な真理である。パウロが、真理を愛さず、それゆえに強い惑わしを受けることになる者たちを指し示すとき、彼は確かに一般的な意味における真理への憎悪をも指摘している。しかし、当該箇所直接参照されている真理は、“the daily”が異教ローマを表しているという真理である。

体の光は目である。だから、あなたの目が澄んでいれば、あなたの全身は光に満ちる。しかし、あなたの目が悪ければ、あなたの全身は闇に満ちる。だから、もしあなたの内にある光が闇であるなら、その闇はいかに大きいことだろう。だれも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、あるいは一方に忠実に仕え、他方を軽んじることになるからである。あなたがたは神にも富にも仕えることはできない。マタイ 6:22-24。

あるのは真理への愛か、真理への憎しみか、そのどちらかだけである。中間はない。マタイ25章の愚かな乙女たちに臨む強い惑わしは、最後の試練を表すミラーの宝石の光を彼女たちが拒むことに基づいている。古代イスラエルの最後の試練は第十の試練であり、終わりの時代にはミラーの宝石が十倍も明るく輝く。ミラーの宝石の拒否を象徴するのが「日ごとの」であり、アドベンチズムの第三世代においてエフライムの酔いどれどもがそ

れをひっくり返した。「日ごとの」は異教のサタンの象徴である。その酔いどれどもは背教したプロテスタントから持ち込んだ偽の宝石を導入し、「日ごとの」をキリストの象徴だと見なした。

ミラーが自らの宝石について持っていた理解は、彼が育った歴史的背景によって制約されていた。ミラーは、次に起こる預言的な出来事は再臨であると確信しており、1798年に教皇制が負った致命的な傷は、ダニエル書2章における第四にして最後の地上の王国を表すものにほかならないと考えた。ミラーはまた「the daily」の理解にも限界があった。というのも、彼自身の証言によれば、啓示によって特定の研究方法へと導かれ、その方法において彼は聖書とクルーデンのコンコーダンスを用い、いくつかの新聞を読んだ、と述べているからである。そのような方法で学ぶという彼の決断は、ただ心に浮かんだだけのものだった。

私が自然神論者であった十二年間、見だし得るかぎりの歴史書はすべて読んだ。しかし今や私は聖書を愛するようになった。聖書はイエスについて教えていたからである。とはいえ、なお私には暗く、理解しがたい箇所が聖書には少なからずあった。1818年か19年のこと、私はある友人を訪ねて語り合っていたが、彼は私が自然神論者であった頃の私を知り、当時の私の語るどころも聞いていた人物で、やや含みのある調子で、自然神論であった頃に私が異議を唱えていた古い聖句を指して、「この聖句やあの聖句を、今はどう思うのか」と尋ねた。私は彼の意図を悟り、「もし時間を与えてくださるなら、それらが何を意味するかをお伝えしよう」と答えた。「どれほどの時間が要するのか」と彼。「分からない。しかし必ずお伝えする」と私は答えた。というのも、神が理解し得ない啓示をお与えになったとは、どうしても信じられなかったからである。そこで私は、聖霊が何を意味しておられるのかを見だし得ると信じ、聖書を研究する決心をした。ところがこの決心を固めるやいなや、「もし理解できない箇所に出会ったら、どうするのか」という思いが胸に浮かんだ。そのとき、次のような聖書研究の方法が心に浮かんだ。すなわち、そのような箇所に出てくる語を取り上げ、聖書全体を通してその語をたどり、このようにしてその意味を見だし、という方法である。私はクルーデンのコンコーダンスを所持していたが、それは世界で最良の書であると思っている。ゆえにそれと聖書を手に取り、机に向かい、新聞を少し読むほかは何も読まずに、私の聖書が何を意味しているのかを知ろうと固く決意していた。アポロス・ヘイル『再臨の手引』65頁。

ミラーの宝石は、彼の研究方法によって単に見いだされたものではなく、神からの直接の啓示によっても示された。

神は、聖書を信じていなかった一人の農夫の心に働きかけるために御使いを遣わし、彼を預言を探求するよう導かれた。神の御使いたちはその選ばれた者を繰り返し訪れ、彼の思いを導いて、これまで神の民にとって暗く閉ざされていた預言を彼に理解させた。真理の鎖の最初の環が彼に与えられ、彼はさらに導かれて環から環へと探し求め、ついには神の御言葉を驚きと賞賛の念をもって仰ぎ見るに至った。彼はそこに完全な真理の鎖を見た。かつて彼が靈感のないものと見なしていたその御言葉が、今やその美しさと栄光をもって彼の目の前に開かれた。彼は、聖書の一部分が別の部分を説明していることを悟り、ある箇所が理解に閉ざされているときには、御言葉の別の箇所の中にそれを解き明かすものを見いだした。彼は、聖なる神の御言葉を喜びをも

って、またこの上ない敬意と畏敬の念をもって受け止めた。Early Writings, 230.

ホワイト姉妹が、神がミラーのもとに「ご自分の御使い」を遣わされたと述べるとき、それはミラーに遣わされた天使がガブリエルであったことを示している。というのも、「ご自分の御使い」という語はガブリエルを指す呼称だからである。

天使の「私はガブリエル、神の御前に立つ者である」という言葉は、彼が天の宮廷において非常に高い栄誉の地位にあることを示している。彼がダニエルにメッセージを携えて来たとき、こう言った。「この事において私を助ける者は、あなたがたの君であるミカエル [キリスト] のほかにはいない。」ダニエル10章21節。黙示録において救い主はガブリエルについて語り、「彼は御使いを遣わして、そのしもべヨハネにこれを示された」と言われた。黙示録1章1節。The Desire of Ages, 99.

ガブリエルとほかの天使たちは、ミラーの心を導き、神の民にとってこれまで常に暗かった預言を、彼の理解へと開いた。彼のメッセージは、彼自身の研究方法によって単に形成されたのではなく、神的啓示によっても形成された。彼が聖書を研究するために用いたその方法自体も、ふと彼の心に浮かんだものであった。神が真理を私たちの心にもたらすとき、それは、聖書を正しく区分する過程を通して真理に到達することとは異なり、神的啓示である。ミラーはその双方を行ったが、彼が『the daily』という主題を理解するに至った経緯には、神的啓示が一部をなしていた。

ミラーは、手元にあったのが聖書と、聖書の言語に関する情報を一切含まない語句索引だけだったため、ダニエル書8章9～12節における文法上の性の揺れには気づかなかっただろう。彼は、いずれも「取り去る」と訳される「sur」と「rum」の区別も見分けられなかっただろう。さらに、いずれも「聖所」と訳される「miqdash」と「qodesh」の違いにも気づかなかっただろう。

彼は、聖書において百四回出現するヘブライ語『tamid』という語に関する真理を見いだすことはなかったであろう。彼が見いだすことができなかった（しかもそれは、彼が実際に見いだした）真理とは、ヘブライ語『tamid』は聖書で百四回用いられているが、そのうち名詞として用いられているのはダニエル書においてのみである、ということであった。『tamid』は「不断」を意味するヘブライ語であり、ダニエル書では「the daily」と訳されている。

その語が名詞として用いられているのはダニエル書においてのみであり、その他の九十九回は副詞として用いられている。このため、聖書の他の著者たちがその語を九十九回にわたり副詞として用いているのに対し、ダニエルがその語を五回名詞として用いている事実直面した欽定訳聖書の翻訳者たちは、証拠の重みゆえに、ダニエルの名詞としての用法を「訂正」せざるをえなくなった。ダニエルを「訂正」するために、彼らはその語に「sacrifice」という語を付け加え、こうして名詞を副詞に変えてしまった。そして翻訳者たちを正すために、エレン・ホワイトは靈感を受けて次のように記した。「『Daily』に関して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではない。そして主は、審判の時の叫びを告げた者たちにその正しい見解をお与えになった」と。

ミラーは、彼自身の証言によれば、“the daily”を理解しようとしており、最終的にはテサロニケ人への第二の手紙の中でそれを理解するに至った。しかしまた、彼自身の証言によれば、語を理解しようとする際には、その語が用いられているすべての箇所を検討したという。そしてその語は、聖書の中でほかに九十九回用いられている。それにもかかわらず、“the daily”に関する彼の証言は、それをダニエル書以外のどこにも見いださなかったというもので、彼はこう述べている。「私は読み進めたが、それ [the daily] が見いだされている他の事例を、ダニエル書以外には見つけることができなかった。」ミラーが宝石へと導かれたのは、彼の研究方法だけによるのではなく、天使の奉仕を通して彼に与えられた神の啓示によるものでもあった。

このため、彼の“the daily”の理解は正しかったが、限定的だった。彼は、ダニエル書で“the daily”が五回言及されているうち、“the daily”が「取り去られる」とされている三回のうちの一回が、他の二回とは異なる意味を表していることを認識できなかった。一度は“the daily”がヘブライ語の‘r u m’ という語とともに用いられ、残りの二度はヘブライ語の‘sur’ という語とともに用いられている。どちらの語も「取り去る」と訳されるが、ダニエル書八章十一節の‘rum’は「持ち上げて高める」という意味であり、十一章三十一節と十二章十一節では‘sur’は「取り除く」という意味である。

バビロニアの食事を食べ、飲む神学者たちは、物を取り去ることも、物を持ち上げることも、どちらも一種の除去を表しているのだから、両方の語は同じ意味を持つと理解すべきだと主張する。彼らは、「the daily」が三回「taken away」されるというのは、いずれも取り去ることを意味すると主張し、そのことによって、ダニエルは語の選択において不注意であったと見なすことになる。彼らはそれを公然とは言わないが、含意として、ダニエルは三回とも『sur』という語を用いるべきだったと教える。というのも、神学者たちによれば、「the daily」が「taken away」されるたびに、彼は毎回同じことを意味していたはずだというのである。

彼らは、第八章の十一節から十四節において、いずれも「聖所」と訳される ‘miqdash’ と ‘qodesh’ という語についても同じことをしている。これら四つの節での「聖所」のそれぞれの用例は、すべて神の聖所を表すのだと彼らは主張する。すると論理的には、ダニエルは三箇所すべてで単に ‘qodesh’ を用い、十一節で ‘miqdash’ を用いるべきではなかった、ということになる。ミラーはそれらの語の区別を認識していなかっただろうが、現代の神学者たちはそれを認め、しかも認めておきながら、区別は認めるべきではないと主張する。それでもなお、語の区別を認めなかったミラーは、現代の神学者たちとは反対の理解に到達した。

実際には、ダニエルはヘブライ語に精通し、バビロンの他のすべての賢者よりも十倍も賢いと評された、慎重な書き手であった。ヘブライ語の正しい用法、そしてそれがその特定の歴史的記述においていかに正しく表現されるべきかを知っていた者がいるとすれば、それはダニエルである。ダニエルが異なる語を用いたのなら、それは異なる意味を伝えるためであり、彼が意図的にそう表現しようとしたからである。「聖所」や「取り去る」と訳される語に関するダニエルの明確な使い分けが認められるなら、それは「the daily」に対するミラーの理解を支持する。この理解は、パウロが真理を憎む者は強い惑わしを

受ける運命にあると示しているまさにその箇所で、ミラー自身が認めたものである。

真理を憎み、強い惑わしを生み出す偽りを信じる者たちは、二つの階級に分けて描かれているエフライムの酔いどれとしても表されています。一方は学識ある指導者層、もう一方は学識ある者が教えることしか聞かない無学な人々です。彼らは偽りの陰に身を隠し、死と契約を結ぶ者たちです。彼らはマタイ二十五章の愚かな乙女たちであり、ハバクク二章にある心が高ぶっている者たちです。彼らは、終わりには十倍明るく輝くミラーの夢の基礎的真理（現代イスラエルに対する第十にして最後の試練を表す）を、古代イスラエルの第十にして最後の試練によって型示されているにもかかわらず、拒む者たちです。

次回の記事でこの研究を続けます。

主はモーセに仰せられた、「この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしが彼らの間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。わたしは疫病をもって彼らを撃ち、彼らをその嗣業から断ち、あなたから彼らよりも大いなる、彼らよりも力ある国民を起こそう。」モーセは主に申し上げた、「それではエジプト人がこれを聞くでしょう（あなたが御力をもって、この民を彼らの中から導き上られたからです）。そして彼らはこれをこの地の住民に告げるでしょう。彼らは、あなた、主がこの民のただ中におられ、あなた、主が顔と顔を合わせて見られ、あなたの雲が彼らの上にとどまり、あなたが昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らの先に進まれることを、聞いているからです。今、もしあなたがこの民をひとりの人のようにことごとく殺されるなら、あなたのうわさを聞いた諸国民はこう言うでしょう。「主は、彼らに与えると彼らに誓われた地にこの民を導き入れることができなかつたので、荒野で彼らを殺したのだ」と。」

それゆえ今、どうか、あなたがこう仰せられたとおりに、わが主の御力が大いなるものとなりますように。「主は忍耐深く、豊かな慈しみに富み、咎と背きを赦し、しかし罪ある者を決して無罪とはされず、父祖の不義の報いをその子らに、三代、四代に至るまで及ぼされる。」どうか、あなたの大いなる慈しみに応じて、またあなたがこの民をエジプト以来今日に至るまで赦してこられたとおりに、この民の不義をお赦しください。主は仰せられた、「あなたの言葉どおり、わたしは赦した。しかし、わたしは生きている。まことに全地は主の栄光で満たされるであろう。わたしがエジプトと荒野で行ったわが栄光と奇しき御業を見ながら、今までに十度もわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかつたその者たちは皆、まことに、わたしが彼らの父祖に誓ったその地を見ることはない。わたしを侮った者のうち、一人としてそれを見る者はない。ただし、わたしのしもべカレブは、そのうちに別なる霊があり、全き心をもってわたしに従ったゆえに、彼が行ったその地へ、わたしは彼を導き入れよう。彼の子孫はそれを所有するであろう。」民数記 14:11-24.